

鈴木鎮一著「子どもを下手にする方法—ヴァイオリン教室のお母様達へ—」

才能教育、NO.181、秋 2012 年を読む

## ヴァイオリン教室のお母様達へ

### 1. 子どもを下手にする法(1)

(1)「子供が先をやりたがりますので、次の曲を教えました」

と言う人がぼつぼつと出て来る。

(2)これは、子供が先をやりたがるのではなくて、親が子供に先をやらせたがる人々の声であります。

(3)少し弾け始めて来ると、子供に向って、

「Aちゃんは、もうガヴォットがすんだのに、お前は遊んでばかりいるので、負けてしまったじゃありませんか」

とか、

「Bさんは、あとから始めて、もうお前と同じところをやっているらっしゃる。ぐずぐずすると追いぬかれてしまうよ」

とか、親の考え方や言葉の表現が、競馬と同じように、だんだんに似て来ます。

(4)子供にちょいちょいと、こういう示唆を与えている間に、子供も競馬的になり、親の口から、

「子供が先をやりたがりますので」

ということになります。

(5)こうなると、もう病的に近く、先生の言われる大切な注意、

「前にすんだ曲を毎日、立派な音を出すように練習をして下さい。それから、今やっている曲をキチンと落ち着いて正確に仕上げるようにして下さい」

というような才能教育として上手になる要点などは、もう耳にも心にも入らなくなります。

(6)これが一人二人三人と伝染して行って、一つの教室の大半が先をいそぐ親達の競馬場となり、小馬に鞭打って、走れ走れとなります。

(7)そうなった親達に向って私は、

「そんなに先をおいそぎになって、どこへいらっしゃるんですか？決勝点はありませんよ」

という冗談をとばしているのです。

(8)私はここで、はっきりと申しておきます。

(9)「親に、この心が始まったならば、必ずその子供は下手になる」

ということ。これは、わたしの二十年の実験を盛った言葉であります。

### 2. 子供を下手にする法(2)

(1)レッスンの時に、自分の子供を前に置いて、

「この子は我が儘で、どうしてもおけいこを進んでやりません」

と、先生に告げる人があります。

- (2)このような言葉を、子供を前にして先生に訴える親は、子供の心に「我が儘の公認と、不勉強の公認」を与えてやったわけになります。
- (3)子供の心は、ますます我が儘に強く、不勉強に自信を持つようになります。
- (4)これに反して、
- 「この頃、少しずつでもやるようになりました。だんだん弾けて来たようです」
- と、親が言って下されば、先生も調子を合わせて、
- 「少しずつ、よくなりましたね。もう少し余計におけいこをすると、ぐんぐんとうまくなるでしょう」
- と、子供に向かって言うことができます。
- (5)子供の心に、勉強しようと思う心の負債が積まれてゆきますから、そのうちには、やり始めます。
- (6)根気仕事です。
- (7)子供の心に与える影響を考えて親達は根気よく、このような言葉をつづけるべきです。
- (8)駄目だとか、我が儘だとか、いたずらだとかと、子供に向かって言うことは、ますます公認にする手伝いをしているにすぎないではありませんか。
- (9)反省の心を育ててもらわなかった人こそ、一生の不幸です。不良とか何とか、人々から白眼視される不幸な人々は、心に反省する才能を育ててもらわなかった人々だと思えます。

### 3. 子供を下手にする法(3)

- (1)「ここ二三日、とてもいそがしかったので、おけいこを休んだから今日、三日分やりましょう」
- という考え方は、ちょっと変であります。
- (2)「ものを育てる」ということは、この考え方では間違っています。
- (3)病人に昨日と今日、薬がないので、明日三日分いっぺんにのませようとしたり、ここ二三日、水を忘れたので薬が赤くなって来たから、今日四日分の水をやっておいた。明日は青々として来るだろう、と考える呑気のんきな人と同じで、ものが育つ法則を思わない人々であります。
- (4)今日一日休めば、昨日の能力もうすらいで二日分の損失となります。
- (5)二日休めば、一昨日の能力までうすらいで、四日分の損失となります。
- (6)このように考えてこそ、ものの育つ天の理がわかる人々の考え方だと思えます。
- (7)また、この理があればこそ、人類の間に、凡・非凡の能力のあまりにも大きな差が生まれて来るわけでありましょう。

### 4. 子供を下手にする法(4)

- (1)家庭でおけいこをするとき、子供が弾きはじめるとすぐに、
- 「それ、いけない」
- 「そこは、ちがっている」
- と、弾いている子供が手も足も出ないように世話をやくお母様があります。
- (2)貴女あなたがお勝手をやるときに、そばから貴女に向かって、その位いちいち口を出されては、味も形もなり立たず、自分の頭で考えてやろうとする暇もない。そして、しまいには、うるさいと思われるでしょう。子供も同じことです。

- (3)間違っている、まず一度はだまっけていて弾かせてしまうことが大事なやり方です。そして下手でも、弾き終わったら、  
「よく弾けたねえ」  
と、子供の努力に対する讃辞を与えて下さい。
- (4)「とても下手だ」  
と言ってから、訂正の勉強をやって、  
「よく弾けたねえ」  
と言ってから、矯正のお稽古をやって、どうせ、よりよく直すことをしなければ上達しないのですから、子供の心理を思えば、駄目だと言われて矯正されるより、ほめられてから矯正される方が、気分的にまるで問題になりません。
- (5)「ほめたら必ず、よりよく矯正するのだ」  
ということを忘れないで下さい。そして、ほめておいてから、悪い箇所をゆっくり直してあげて下さい。
- (6)「駄目だ」  
「下手だ」  
と、毎日くり返しておられますと、子供も親のその暗示のままに下手になり、嫌気がさして、  
「どうせ私は…」  
という心が、はっきりと頭脳活動を鈍らせて来ること、受け合いです。
- (7)何事によらず、下手は上手の反対だ、ということを考えてみて下さい。
- (8)下手にするには、工夫はいりません。

[コメント]

ヴァイオリン教育で世界中でめざましい成果をあげ続けているスズキメソッドの創始者、鈴木鎮一先生の家庭教育論は、親ばかりでなくすべての教育者に参考になる。部下をもつすべての上司に参考になる。子供を下手にする法(1)～(4)を自分なりに翻訳してこれからの生活、活動に役立てたい。